

## 小児歯科・口腔医学からの難病対策

岡 暁子 福岡歯科大学 教授

### 【研究要旨】

小児期に経口からの栄養摂取が障害されると、咀嚼や嚥下など、正常な発育過程で習得されるべき口腔機能に遅れや獲得不全が起きる可能性が高い。医学の進歩に伴い小児慢性疾患患者が成人年齢に達する症例が増加し移行期における医療体系の整備が求められている中、出生後、経口による栄養摂取が不可能であった希少難治性慢性消化器疾患に罹患している小児、移行期、成人期の患者の口腔形態や口腔機能の実態は不明である。我々は、小児歯科・口腔医学からの難病対策を考える上で、まず、希少難治性慢性消化器疾患に罹患している患者の歯・口腔粘膜・咬合を含めた口腔実態の特徴と問題点を明らかにする必要があると考え、実態調査の実施を計画した。しかしながら、新型コロナウイルスの影響により共同研究機関への出向が難しくなり、実態調査が難しくなったため、先行し、保護者への口腔形態・機能に関する「難治性小児消化器疾患を有する小児の歯科受診実態調査」と題しアンケート調査を開始した（資料1）。平行して、口腔機能を評価する方法を確立するため、定型発達の小児を対象とした構音機能に着目した機能評価についての研究を開始した。難治性小児消化器疾患の実態を明らかにして、小児歯科医療が果たすべき新たな役割の探索を継続することとしている。

### A．研究目的

希少難治性慢性消化器疾患に罹患している小児、移行期、成人期の患者の口腔形態や口腔機能の実態を明らかにし、歯科医療の側面からのサポートを模索する。

～12歳までの男女70名の定型発達児を対象として 両唇音構音時の口唇閉鎖の有無、歯間化構音の有無について調査した。

（倫理面への配慮）

本調査は、福岡歯科大学研究倫理審査委員会の承認のもと実施された（許可番号第542号および第562号）

### B．研究方法

- 1) 口腔実態調査：対象となる患者は、福岡歯科大学医科歯科総合病院への通院はないため、共同研究施設である九州大学へ通院する患児を対象とした。本調査は、新型コロナウイルスの影響を受け途中中断となった。
- 2) 九州大学での研究許可を得て、説明文とアンケート用紙を九州大学に送付し、対象となる児が通常診察で来院した際に、歯科受診実態調査アンケートの記載を保護者に依頼してもらった。
- 3) 口腔機能評価法の確立：構音機能に着目した口腔機能評価法の確立を目的として、6歳

### C．研究結果

- 1) 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、口腔内診査を含む対面での実態調査については、実施できなかった。
- 2) 歯科受診実態調査アンケート調査については、現在進行中である。
- 3) 被験者は、現在も増加しているが、これまで70名の調査を終了し以下の結果を得た。  
両唇音構音時の口唇閉鎖の有無：30名（42.9%）の児に両唇音構音時の口唇閉鎖が観察されなかった。 歯間化構音の有

無：36名（51.4%）の児に歯間化構音が観察された。

#### D．考察

希少難治性慢性消化器疾患に罹患している小児、移行期、成人期の患者の口腔形態や口腔機能について引き続き調査を行い、その実態を明らかにしていきたい。また、口腔機能評価については、機能評価方法、評価基準の作成が重要であり、定型発達の小児を対象とした標準値の作成を平行して行う必要があると考えている。

#### E．結論

難治性小児消化器疾患を有する小児の口腔実態については、未だ十分な調査資料を取得できていないため、本研究については今後も継続していく。

#### F．研究発表

1. 論文発表
  - 1) 田口智章，永田公二，岡 暁子：希少難治性慢性消化器疾患の移行支援総論．小児科診療，2022(2) 273-280
2. 学会発表
  - 1) 「小児における口腔機能と構音獲得率の検討」第48回福岡歯科大学学会 2021年12月
  - 2) 「口腔習癖をもつ小児における構音中の口唇および舌の動きの観察」第46回日本口蓋裂学会 2022年5月
  - 3) 「口腔機能発達不全症へのアプローチ」令和4年度福岡県歯科医学会シンポジウム 2022年8月

#### G．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし